

大沢

一九八一年七月二日

手沢の遡行に意外に時間がかかって大沢を見降ろす七ツ森東方の尾根にでたのは一五時を過ぎていた。さっそく下降開始。

七ツ森の北側斜面は、ブッシュが薄く、通過は比較的楽である。一〇分ほど下ると、沢の形態をとり始め、水流が出てくる。この沢も花崗岩質のようだ。これなら期待がもてる。やがてクマのフンが出てきた。まだ新しい。足跡や草の折れ具合からして、今しがた通過したばかりのようだ。何だかいやな感じと

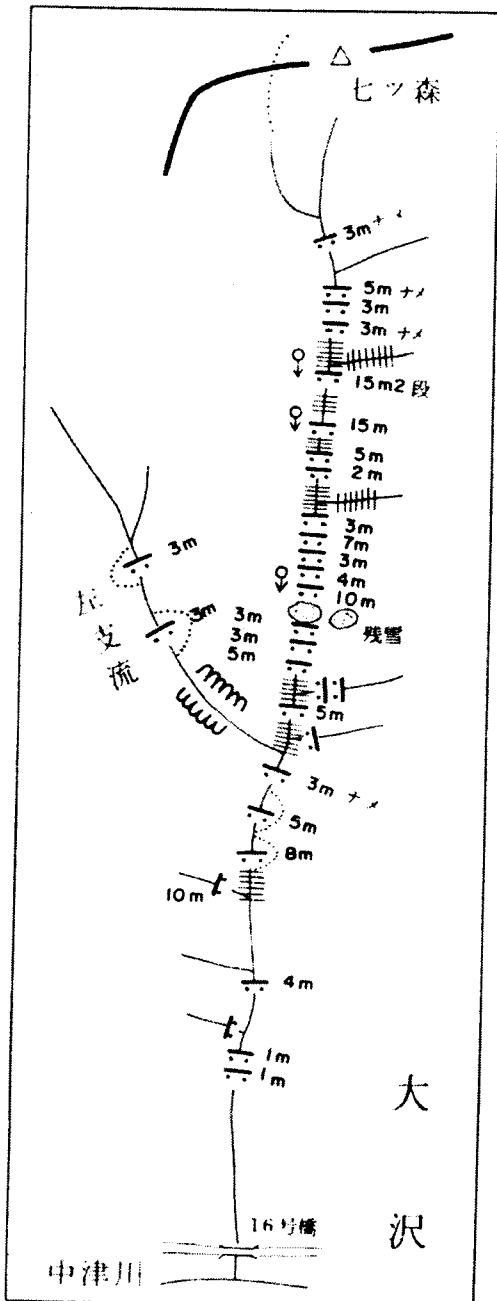
なる。でも、下るしかない。出発。

「何か話し声がしないか」「こんな所に人が来るわけないだろう」「クマかもしれないぞ」

こんなことを言っているうちに、二頭のクマに出会う。クマは、立ち

止まった我々を尻目に、沢から尾根へと悠々と上がって行くところだった。突然のハチ合せをしなければ、まず襲われることはないと思っていた。でも、クマというといい気持はしない。

「クマが捲いていったんだから滝があるぞ」と話していたら、本当に滝が出てきた。しかも連続で出てくる。落差は一五メートルが最高。いずれも若干ナメ状である。ブッシュを利用



用したり、慎重にクライミングダウンするが、三本だけはザイルを取り出して懸垂下降した。ミスアカが着いて滑りやすいが、登りに使うなら快適さが味わえそうだ。

今しがた崩壊したばかりの雪溪のそばを通る。もう滝も小型のものばかりとなり、前方の傾斜もゆるやかとなってきた。

かなり時間が気になってきたので、

休みなしでどんどん下る。やがて五箇の滝がポツンポツンという感じとなり、まもなくそれもなくなる。いよいよ中津川林道も間近である。

第一六号橋到着一七時五五分。

(記・五・一〇)

「タイム」 下降開始(一五・一五) ↓
終了(一七・五五)

大沢左支流

上野山 大沢左支流 大沢
一九八四年一〇月一〇日

日蔭沢をつめ、源頭から尾根を右側にトラバースすると、木の枝に赤テープが巻いてあった。釣人の目印だろう。そこから急な斜面を北東に向かってかけ降りると、大沢の支流に出た。

滝があるが、それぞれ直瀑なので、高捲いて下る。

この先ナメとなり、やがて河原状となる。そして林道へ。

林道に出た所で、釣人に声をかけられた。この釣人、以前我会で出版した吾妻の沢の本(吾妻山 その溪谷美をたずねて)をいい資料としているということであった。沢の話をしながら車をデポした所まで便乗させてもらう。

(記・

「タイム」 尾根(一三・五五) ↓大沢
本流出合(一四・四〇) ↓下降終
了(一六・〇〇)

コケが生えていて滑りやすい。足元に気を配って下ると、三箇の滝が続く。右、左とヤブを捲いて下る。このあとしばらくして本流に出た。ここから沢は急に明るくなって、河床が白くて美しい。五箇、八箇の